

ロータリーの心

笹氣幸助パストガバナー講演より

1977～78年

仙台ロータリークラブ会長

岩 本 正

序

仙台ロータリークラブ直前会長

岩 本 正

私は昨年度、仙台ロータリークラブの会長をさせていただき、毎例会、3分間スピーチをやらせていただいた。内容は、必ずロータリーに関することに限った。

話の材料は先輩ロータリアンの方々のご著書に負うところが多かった。仙台ロータリークラブのものでは、「佐藤幸三先生を偲ぶ」、「佐々木孝三郎遺稿集」、「仙台ロータリークラブ40年史」などであったが、一宮ロータリークラブの安野譲次バスターガバナーの「はげすずめ」を読んで、仙台ロータリークラブの笹気幸助バスターガバナーが、岡崎市で開かれた国際ロータリー第360地区1972年～73年年次大会に国際ロータリー会長代理として講演をされたことを知った。実は笹気幸助バスターガバナーがそのとき国際ロータリー会長代理として岡崎に行かれたことは知っていたが、そのときの講演が非常に素晴らしい内容のものであったということを「はげすずめ」によって知ったというほうが正しい。私はそれまで、その講演の内容を知らなかったのである。

その後、機会があって、笹気幸助バスターガバナーからその講演の全文を読ませていただいたとき、それが、おだやかな表現とともに格調高く、ロータリーの全てを尽くされているものであることを知って驚嘆した。

私は、この講演を私の3分間スピーチに取りあげさせていたどうかと何度も試みた。

しかし、これだけの内容を3分間で伝えること自体が

R. I. 会長代理メッセージ

R I 会長代理 笹 氣 幸 助

難しいばかりでなく、たとえ、もっと時間を使ったとしても、私の力をもってしては、笹気バスターガバナーの「ロータリーの神髄」をお伝えすることは不可能であることが分かってきた。それは不完全な複写器で何度もコピーを繰り返してゆくようなものである。

ロータリアンは、この講演の原文を、繰り返し、じっくりと読んでゆくことが、ロータリーを知るために大切なことであると考えるにいたり、笹気幸助バスターガバナーに無理をお願いして、この講演の全文を印刷させていただいた。

心あるロータリアンはどうぞ十分にご活用いただければ幸いである。

1978年7月10日

本日私に与えられました第1なさねばならぬこと、そして私自身もそうしたいと願っていますこと、それは国際ロータリー会長ロイ・D・ヒックマン氏、並びにドロシー夫人の心からなるご挨拶を皆さまにお伝えすることでございます。

皆様も御承知のとおり、ヒックマン会長は世界に於ける数ある地区大会に全部出席することはできません。しかし、こちらの大会には是非出席したいと念願しておったようでございますけれども、スケジュールの関係上どうしてもそれができなくなって

しまいました。もしも、この大会が12月13日頃に開催されますならば、或いは会長自身出席されたかも知れません。それは12月13、14日の両日日本に来られるかも知れないからでございます。

そのようなわけで、私は皆さまに対しヒックマン会長はそのターゲットを通して、その心は「常に皆様方と共にある」ということをお伝えするように命を受けた次第でございます。私はこうして皆様にお目にかかり、会長の代理として、その心をお伝えできますことは私のこの上もない光栄と存ずるところでございます。

先程、流石にこちらのベテラン中のベテランの安野ガバナーの御挨拶の中でいろいろお話を伺いましたが、私も実はお話を申し上げようと思っていたことが、すっかりそのまま言われてしまったような形で、何も申し上げることがなくなってしまったみたいでございます。しかし、私は私なりに一つヒックマン会長の掲げましたターゲットに対し私の考えを申し述べたいと思います。

歴代の会長は、



ロータリアンとしてのあなたの資格を効果的に参加し敢行しよう。

また、再検討し、刷新しよう。

隔りをとり除こう。

それに昨年は善意は先ずあなたから。

その後を受けて、もう一度見直そう——そして行動しよう。

というのです。甚だ時宜を得たものと存じます。1人のロータリアンとして、或いはクラブ会長として、はたまたR Iの理事、或いは会長として、もう一度見直そう、そうすればロータリーも自ら新しい様相を示すだろうと、会長自身我々——ロータリアンと共に反省し、見直し、そして実行しようと呼びかけております。

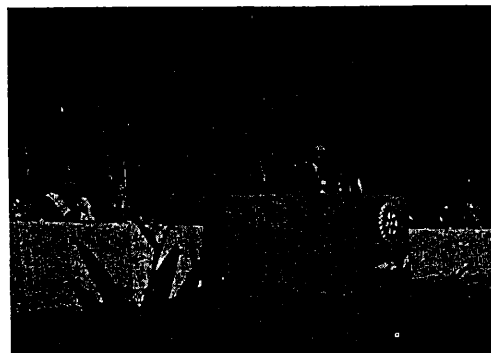
私たちはこのターゲットに対して、果して、どのように受け止め、考え、そして行動しているのでしょうか。私共がこのターゲットに対して、その意にそって行動するならば、ロータリーもまた自然に新しい方向に向かって、いくらかでも動いて行くはずでございます。

ポール・ハリスも「ロータリーには変えなくてもよいものは一つもない」といっております。将来を見つめて下さいとは言っておりますけれども、何も古いものは全部捨ててしまっ、新しいもののみを考えよう、行なおうといっているのでは勿論ございません。

我々の諸先輩の残した大きな事績を土台としてその上に立って少し角度を変えてみよう、アングルを変えてみようじゃないか、アングルを変えてみて欲しい、そうすれば必ず新しく何物かを発見できるはず、何時も同じものを同じように見ておったのでは進歩発展どころか、いわゆるマンネリになってしまいます。それではさつき申し上げましたように、`退歩`になってしまいます。或いはまたロータリーの行事屋といいますが、行事ばかりを一生懸命やっているといったような`行事屋`になってしまう恐れさえもございます。

本日のプログラムにもありますし、あそこの表の塔にもございましたが`温故求新`、——まことに言い得て妙と存じます。その物ずばりでございます。これこそヒックマン会長のターゲットそのものです、流石に古い歴史と立派なロータリアンの揃っておられるこの地区乃至はクラブのあり方に、考え方に非常に感謝感激しているわけでございます。

では、どうロータリーを見直さなければならないか。ヒックマン会長はロータリーは前進する力であるということを強調しております。それはロータリーのための新しい何かを提示することを求めているのでございます。それはロータリーを時代に適應させるためにほかなりません。一人一人が関心を持つことに依ってロータリーに新しい生命を与えることができるからでございます。しかし、ある人はそういうかもしれません。`個人の力で何ができるか`と、これに対してよく言われますとおり`誰でもやる気さえあれば、やりたいことだけにはできるものだ`、これを一つお互に心に深く刻みつけたいと存じてお



ります。

またヒックマン会長はR Iの会長としてロータリーの価値をもう一度見直す、そのことは自分自身の義務でもあり、またわが身自身に言い聞かせておると言っております。そしてそれは彼自身を含めて一人一人の我々ロータリ

アンに対する呼び掛けでもございます。そしてそれはロータリアンとして、もう一度見直すことに依ってその綱領を四つの奉仕部門に於いて実践しようという提唱に他なりません。

皆さんも自問自答していただきたい。それはクラブ奉仕を実際に実践しているだろうかどうか。よくロータリーは出席からといって、そういうような標語を作って実行されているクラブを見、聞きいたします。皆さんはその土地土地に於いて一流の方であり、かつまた指導者でございます。そしてその例会は週一回その指導者の方々の集まる所なんです。自分の職業以外の一流の方々と顔を合わせて話し合える、そんな会合等他にどんな会合がありますか。

この例会毎に会員同志が握手し、話し合い、交友を暖め、そして親睦を深めて真の友人になったなら、そして心の底まで話し合えたら、その話し合いが例えだべり合いであっても、その話の中には自分と違った分野の人、立場の違う友人からの意見なり体験なりが必ず入って来るものです。そして、それから得

るところのものは真に大なるものがありましょう。そしてこれらの友人の体験を分ち合えば皆さんは如何に自分自身を豊かにすることができるでしょう。

田中総理大臣はコンピューター付のブルドーザーだということですが我々と雖もその頭脳の中にはやはりコンピューターは持っております。しかし如何にコンピューターであっても資料をインプットしてやらなければデータは出て参りません。その大切な、立派な資料の補給場所が例会でございます。そういう意味で出席は大変重要なことになって来るのではないのでしょうか。例会は人生の道場であるといわれる所以もここにであると存じます。もし故なくして欠席される方があれば、それはこのような大事なチャンスを自分自身でお捨てになってしまうこととなります。勿体ないことではございませんか。

1
4

昨年の春お亡くなりになりましたが、1925年～26年度のR I会長であったドナルド・A・アダムスは彼の演説中でロータリーとは「人生をどう生きるか」ということ誰にとっても最もむずかしいことを「何うするかという知識を人類に与えるものである。地球上では我々の生涯で「人生を生きる」ということを学ぶことは殆んどない。また、生の終着に到達した人でさえ人生の生き方を学び終えたというような人はないだろう。凡そ私たちにできることは出発することだけである。昨日までは、否、今の瞬間まで既に過去であり、これを修正したり、逆戻りしたりすることはできない、できることはこれから出発すること、そのみである。もし我々が出発すれば、そしてそれが早ければ早い程それだけ幸福になるはずである。そしてそれはロータリーが人々に教えようとしている所のものである。とこういっております。

これは私たちにロータリーの例会、アッセンブリー、フォーラムとかすべての集会で私たちの心のあり方、考え方、奉仕の仕方などを学び合うということではないかと思ひます。そして、それを一刻も早く実践しようということではないかと思ひます。もともとロータリーは奉仕団体ではなくて、奉仕をする人々を育てる所であるともいわれております。各々の心の境地といひますか、その開発、発掘する場所でもあるのでございます。

しかしロータリーには先生はございません。生徒もおりません。お互がすべて先生であり、生徒であるはずでございます。お互が切磋琢磨する場所でもございます。そしてロータリアン自身が即ちロータリーであるはず。地域社会は

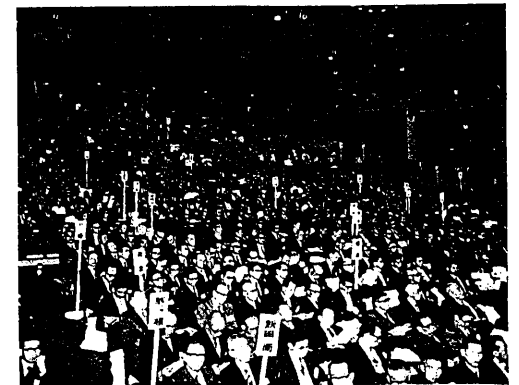
ロータリアンをロータリーとして注視しているでございます。そしてロータリーは如何に行動し、如何に振舞っているかを皆見守っております。

また皆さんはこのターゲットを自分自身にこのように問いかけてみられたことがございましょうか、¹「長年の友人にロータリーの手を差しのべたことがありますでしょうか。話し合つてロータリーを分ち合ったことがないのではないかと。」また自問自答してみます。²「自分は新しい会員をロータリーに紹介したことがあったらうか。この前紹介したが、それから何年になるだろう。その間、自分はそのようなことに関心を持ったことがあったらうか。」皆さんも何とかこれを実行するように——とはヒックマン会長の願ひでございます。これは何を意味するかご存じでございます。

自己を豊かにし、奉仕の機会を求めめるために親睦を通じて知己を拓けて行くクラブを強化する、地域社会をよくして行く、そういうのに最も近道であり、良い方法であるのでございます。そしてそのためには年輩の方は勿論必要ですけれどもできるだけ若い会員の発見、獲得が必要でございます。それは次の時代を担うロータリアンの育成に力を注がねばならないからでございます。

よく禪寺などに詣りますと「脚下照顧」という言葉を見ることがあります。足許に注意ということでしょう。まず自分の身近なところから顧り見よということだろうと思ひます。皆さんはご自分のクラブの友人を本当によくご存じでしょうか。

私の仙台クラブは会員数110名でございますが、確か一昨年だったと思ひますけれども、親睦委員会でその年度始めに会員全部の氏名を一枚のザラ紙に印刷して氏名だけを見て、よく知っている人の名前に○印を付けて貰ったことがあります。そうしたらどうでしょう、全会員によく知られていたというのはたった4名だけでした。平均してみると知っている人は全



体の55%ぐらいで、あとの45%位は一方は知っていても片一方は知らないとか、或いは両方共よく知らないというような結果が出て本当にびっくりした次第でした。これは会員数が多くなればなる程この傾向が出るとは思いますがけれどもこれでは同じ自分のクラブの会員同志でさえ知己になるなどは凡そ縁遠いものではないかと思えます。勿論私の方のクラブではそれから親睦委員会が非常に熱心になったことは当然でございます。

ヒックマン会長はまず自分のクラブからよく知り合うことと、良き交友と親睦を深めることを要請しております。よくお互が知り合うこと、それは交友を深め、協力を生み、そして楽しさを増すものでございます。そしてそのような友人知己を拓めることは何にも増して必要なことと存じております。

更に自問自答してみましょう。『自分の職業を品位あらしめるために努力を傾けているかどうか』これは職業奉仕の実践でございます。では職業とは一体なんだろうか。それを考える前に、一体我々はどんな手段で生活しているだろうか、我々の愛する家族も共に。これに対する答は当然『それは自分の職業で生活している』では職業はどうしてなりたつか、それは地域社会があるからなんです。

もし、地域社会がなかったなら、自分一人であったなら『職業』そんなものは成立致しません。これを逆に考えてみますと、地域社会があればこそ職業がなりたつ、我々はそれに依って生活している。つまり地域社会があって初めて生活できるんだ。——ということは、地域社会に依って我々は食べさせられているんだという結論になります。従って、我々は当然地域社会に感謝しなければなりません。

我々は職業を通じて地域社会に恩返ししなければならない。自分の地域社会を少しでも住みよく、少しでも発展するように努力しなければならないということなのでございます。ですから、職業奉仕することは当然すぎる程当然のこととあります。我々は心の底からの感謝をこめて、その天職と申しますか、我々の職業を他人の身になって考え全力を注がねばなりません。

ここに四つのテストが生きてくるわけでございます。地域社会なんかどうでもよい、自分だけが良くなればそれでよいと、もしそう考えたらそれは大きな間違いでございます。地域社会が良くならず自分だけが良くなるなどという

ことはできるはずがございません。そして四つのテストを実践することによって奉仕される方からは『信頼と感謝』がお返しにしてくれるのでございましょう。ここに *He Profits most who serves best* ということが自然に湧き出てくるはずでございます。ですからこうした奉仕には地域社会のためにも良い結果が出て来ますし、自分自身の繁栄にも通じて参ります。

我々の職業奉仕はある意味では社会奉仕ともなっているようにも考えられます。つまり職業奉仕と社会奉仕とはある意味では表裏一体であるというようにも私は考えております。その一番よい例はたとえば印度救済センターの亡くなりました宮崎松記博士やネパールの岩村博士の在り方がそうです。博士たちの行為は立派なこの上もない職業奉仕の一つでございます。この奉仕を受ける方の人から見れば、それはこの上もない社会奉仕かと思えます。

このように社会奉仕は実際問題に取り組むことが必要でございます。でも一言に社会問題といいましてもべら棒に大きい問題から極く小さなものまで数限りなくあります。しかし我々はでき得る問題、手近かな問題に取り組むことが肝要でございます。世の話題になるような大きな問題も大切でしょうけれども気をつけて身の廻りを見渡せば我々の手を待ち望んでいる問題の方がもっともっと多いことに気が付くはずだからでございます。

先年キリスト教海外医療協会から「みんなで生きる」という題のパンフレットを貰いました。それには「みんなとは誰か」という副題でこの題名を付けた理由がございました。それはネパールの岩村博士が重症患者を何日もかかって病院に運ぶ途中、行きずりのネパールの一青年が患者をずっと背負ってくれた。最後にお礼を渡そうとしたら、『皆で生きるために手伝ったのだからお礼は要らない』といって立去ったという話から、この題目を付けたということですね。お話の中で行きずりの青年、この『行きずり』ということに注意したいと思います。身内の人ならいざ知らず、見ず知らずの人を助けることは本当に難かしい。

しかし、もしあなたが池のほとりとか或いは橋の上を歩いていた時、その水の中に子供が溺れていたらどうでしょう、何か歌の文句にあったようでしたけれど『あなたならどうする』——多分あなたは水の中に溺れている子供を助けるために何らかのことはするでしょう。場合に依っては直に水の中に飛び込む

自分が泳げなければ大声をあげて人を呼ぶとか、或いは助ける手段を咄嗟のうちに考えて実行する、——当り前のことでございます。その子の髪の色が違っていても、皮膚の色が違っていても助けるに違いありません。それが大人であったら、そして手を伸ばして助けを求めていたら勿論こちらも手を伸ばして助けてやるでしょう。——その髪の毛の色が違っていても、皮膚の色が違っていても。——それが例えネパールであろうが、ピアフラであろうが、或いはバングラディシュであろうが助けを求める声を聞いて、聞かぬ振りにはできません。



助けを求める声を聞いたならばなんとかしなければならぬ。何とか考えてやらなければならぬ。でき得るだけのことはしてやらなければならぬ。見ず知らずの人だから或いは行きずりの人選だからといってそのまま勝手に済ませてしまうわけには参りません。これはロータリアンだけの問題でなく人間としての在り方の問題であろうと思います。

当360地区はこの点、本当に多大の世界社会奉仕に寄与されておりますので、本当に感謝感激いたしておりますが、今後共なお一層のご協力をお願いしたいと存じます。

国際奉仕は理解し合い、お互い話しあい、そして国際平和への道を推進すると言った本当にすばらしい方法でございます。先ず理解し合うこと、お互いに話し合うこと、これが大切です。お互いに知り合うことは絶対に必要でございますし、ロータリーはそのチャンスが沢山にございます。

ヒックマン会長のLet's take a New Lookというターゲットは我々の職業にも当然あてはまるものでございます。「千年一日の如く」などいいますけれども、いつでも同じように見、同じように考えて行なっていたならばその職業は取り残されてしまいます。ロータリーのみでなく我々の常住座臥、座右の銘ともしなければなりません。

ロータリーはこの流動の激しい時代にあつて、一刻もゆるがせにせず、確信に満ちた確固たる指導センス、自己の信念を発揮するならば地域社会の指導者としてその地域社会を幾分でも良くし、共に自分自身も豊かになることができるはずでございます。

善意と親睦を人々が手に手をつないで働く時、克服できないような障害はまずありますまい。地域社会のため、国際理解のために、ロータリーの理想である奉仕の理想の遂行に努力するならば、人々をわけへだてているものを互いに結びつけることも可能であるはずでございます。私は昨年シドニー大会でR I 前々会長である。ウォーク氏の演説中に実に印象的な言葉に接しました。

それは「ロータリーは今山を登りつめて平原に出ようとしています。大切なのは今どこにいるかでなくて、これからどこへ向かうかであります。この世に一人でも飢えたる子供がいる限り、一人でも無学の者がいる限り、また打ちひしがれた青年が援助を求めている限り、或いは国と国との間に不和があり、或いはあなたに本当の友達が見付からない限り、ロータリーは必要である。」

どうぞ皆さん今からでも遅くございません。私たちがこれからどうするか、何んな方向に向かうかを考え、我々の綱領をもう一度見直そうではございませんか、そして実行に移そうではございませんか。ありがとうございました。

